[redacted]

二、賑かなセルビアの結婚

―何事も父母の意志次第で動く青年男女―

永代美知代

なり一人二人に同道を賴んで娘の家へ出かける。ピトスルか小銃を忘れないやうに持つて、夕景までに先方へ着く。

嫁を貰ふに拳銃持參

誰か一人が主人と挨拶をしてゐる間に、連の一人が肩で座敷の扉を閉める。これは、かうすれば娘御は閉ぢ込めた、何處へも逃げることはできませぬぞと云ふ象徵である。

客間の食卓には來客の一行と、主人と、主人の男側の兄弟なり親戚なりだけが着席する。女共はみんな茶の間に集つてゐる。さて食事中、來客中第一の雄辯家と目ざゝれるのが、かう云つた式に口を切る。

『御主人、今晩私共が伺つたのは、たゞ御馳走を頂く爲めではありません。實は神樣が御許しになり、且つあなたが御承諾下さるならば是非に懇望致し度いお賴があつて參りましたのです。』

すると主人は澄した顏で、

嫁や聟は父親が探す

セルビアの農民は、その息子が十八になるのを待ち兼ねて急いで嫁を探す。息子は父親の探して呉れた嫁を甘んじて迎へねばならぬのみか、そんなに若い身空で、おまけに自分よりは屹度三つ四つ歲上の女と結婚しなくてはならぬ運命に在る。自由結婚などは數へるほどゝ云つて可い。結婚式の花々しさ！恐らくこの負擔には中農以下は堪へ切れまい。まづ父親はその娘なり息子なりの爲めに花嫁を探す義務がある。晴着を着込んで、近村近在の、所謂「サボルス」といふ舞踏會に出席し、「コロ」といふ踊をおどつてゐる青年男女の中から其の候補者を見つけ出さねばならぬ。娘たちは、みんな赤い羽毛を頭に翳してゐるから、その中から選べは譯は無いのである。

あの娘なら可からうと決る。娘の父親の內意を友人の手で探つて貰ふ。先方も宜しいと決れば、息子の父親は親戚なり友人

『ほゝう、左樣な事とは些少も存じませんでした。何れ結構なお話でせう。さアどうか御遠慮なく仰やつて下さい。』

『難有う。實は御主人、私共は神樣の御許を蒙る事ができれば、どうかあなたと御親戚にさせて頂き度いのです。私の兄弟の、此處に參つてゐますイワンが、御息女ミリトサどのを、長男レーコーに申し受け度い望なのでございます。御意中は如何でございませう。』

此處で、父親のイワンは持參の囊から一つの平つたい小麥菓子を取り出し、その上に小やかな花束を添へて食卓の上に置き、財布から一握の貨幣を出して、中から幾片の金貨と銀貨とを選んで同じく菓子の上に載つける。その金銀貨こそ、未來の舅から未來の花嫁への第一の贈物なのである。

『皆樣、まづ娘が何と申しまするか、古い格言にも「世界は若い者の世界だ」と云ふ事が御座いますからな。』

娘の父親は此定り文句をあとにして、中座をする。

お前の娘は私が購つた

セルビヤの山道

彼は女房の居る居間へ相談に行く。とは云へ、娘を遣らうといふ事は、とつくの昔に定つて居るので、是は勿論、來客に對する形式上の禮儀に過ぎない。直ぐ客座敷へ歸つて來て、客に酒食をすゝめる。客の杯に赤酒をついで、杯をカチリと合せて斯う叫ぶ。

『何事も神樣の思召にかなひますやうに。』

やがて娘の兄弟なり、男側の親族なりが娘の手を曳いて客室へ現はれる。娘は第一に未來の舅にひき合されて、丁寧にお辭儀をしながら、其手をキッスする。それから、一人々々他のお客の手をキッスして、一等おしまひに自分の父親の手をキッスする。そして再び未來の舅の傍へ來て、その手から例のお菓子の上に置いてあつた貨幣と花束とを贈られる、そこで今一度丁寧にお辭儀をして、其手をキッスする。此刹那から娘は愈〳〵此人の息子の未來の妻となつたのである。

娘が貨幣と花束とを持つて茶の間へ歸ると、誰か男の家族が、庭先きへ走つて出て、ドンと一發短銃を放つ、家の娘の一人が婚約した喜びを此筒音で村中へ觸れるのである。

未來の舅はおいとま乞ひに當つて、又一片の金貨をお菓子の上に置く、此金貨は自分の息子の爲めに嫁を買つたと云ふ印である。つまり此家への贈物なのである。

嫁を迎へに聟殿の行列

婚約した娘は、其後幾日か絶つて、未來の舅から婚禮着物と指環とを贈られる。これらの贈物を持つて來るのは、花聟側の親族の役目で、男女大勢打ち連れてやつて來る。そして花嫁側の親族と交際を結んで歸る。

さて愈〳〵取り定められた日取りになる、双方の家では、あらん限りの親族親友を招待して、連日長夜の宴を張る、そも〳〵セルビヤの習慣では、同じ村から嫁聟の取り遣りをしない。成る可く遠方にそれを求める結果、お客は皆な馬に乘つて、ほがらかな田舍道を花嫁の家に集まり、後に花嫁を圍んで花聟の家へ行列する。この行列には一人の指揮者があつて、旅の間中何事も其者の命令に從はなければならぬ。花嫁の馬には縫取した生絹の手巾を掛けて目印にする。稀には手袋を代用する事もある。村中の人から贈られた毛の手巾だの花だのをも、すべてその馬に飾りつける。

斯うして花嫁の行列は花聟側の迎へを待つて賑々しく先方へ乘り込むのである。

ヒルビヤの結婚式に無くて叶はぬ介添人が三通りある。一つをクーム、一つをスタリ・スバッド、今一つをデバーと云ふ。クームは第一主要の介添で、云はゞ結婚の證明者である。大抵花聟の兩親の結婚式を勤めた男の息子とか、第一の近親かに賴む、此人は後々此若夫婦の子供連の名命親になる。當日第一の役は始終お雇ひのギプシイに歌と踊とを絡やさせぬやうにする事と、お客に漏れなく火藥を配ることゝである。男の客は殘らず小銃か短銃を持參して、忘れぬやうにクームから火藥を受取らなければならない。

スタリ・スバッドは第二の立合人である。彼は當日クームが花聟の後ろに立つに對して、花嫁の後ろにつき從ふてゐる。當日の司式者として、坊樣との交渉に忙しい。

デバーは花嫁の導き手で、寸時も其傍を離れない。若し旅行の爲めに幾日もかゝつて、途中で宿をとる場合などには、彼は花嫁の寢る同じ室で寢る義務がある。

一方花聟の家では、數日打つ通しの宴を張つて、やがてよき程に一同馬にまたがつて、短銃を放ち、歌を歌ひながら花嫁の一行を迎へに出る。行列の先頭に大きな酒樽を馬に積み、途で出逢ふ程の人にふるまふ。

迎への一行に酒食を饗し了ると、準備の出來た花嫁は兄弟なり、男の近親なりに手を執られて立ち現はれる。それと同時に、花嫁側の男客は一齊に小銃と短銃とを放つ。

花嫁は第一にクーム、第二にスタリ・スバットの手をキッス

し、つゞいて男客全部の手にキッスする。それが濟むと臺所へ行つて爐邊の椅子に兩親と共に腰を掛け、爐の前の地面をキッスする。こそは火を崇拜した昔の名殘りなのである。立上つて深く腰を折つて兩親を拜し、其手をキッスすると、兩親は娘を抱いて最後の祝福を與へる。兩親の手を離れると、即ちデバーの保護に身をゆだねるのである。

此式の濟むのを待つてゐた花聟の一隊は、ヒラリと馬に飛び乘つて、銃を鳴らしながら花嫁の行列と一緒に、教會へ繰り込む。教會は大抵隨分かけ離れた場所にある。

聟の家へ着いてからの事

教會の式が濟んで、花聟の家へ安着すると、花嫁は馬上から大麥の袋へ、麥の袋から鍬の上へ、鍬から門の敷石へと云ふ順序に下りて行く。門内には赤ん坊を抱いた女が待つて居る、花嫁はその赤ん坊を受取つて、出來るだけ高くさし上げ、キッスをして女に返す。次ぎに、パンの棒を受取つて兩脇にはさみ、赤酒の瓶を兩手に持たされる。其儘で家の中へ入つて行く。

花聟の兩親は廣間か、臺所かに居て花嫁を迎へる。廣い爐には一杯火が燃えてゐる、花嫁は二人の手をキッスして、姑の先頭で、爐の周圍を三度廻り、火かきで燃えてゐる火を一處にかき集める眞似をする。新らしく家族の一員となつたものが、その家の平和と、財産と、幸福とをかき集める意味なのである。

祝宴は恐ろしく賑やかである。面白い事には結婚の祝宴に招待されるお客は、何かしら皆な自分の飲み食ひする御馳走を持つて來なければならぬ習慣になつて居るのである。花嫁はクームとスタリ・スバットの傍で介添人のデバーと共に食事中些少も坐らないで立ち盡してゐる。食事の始まる前に、一人の女が花嫁からお客達への贈物を配つて歩く。

前に花聟の行列の酒樽を運んで歩いた男は、結婚式の間中、いろんなふざけた眞似をして、人を笑はせる義務と權利とを持つてゐるのであるが、當日の祝宴には殊に、花嫁の贈物を一々批評して、一同を笑はせなければならぬ義務がある。例へば彼は、間抜けた大聲を張りあげて斯う叫ぶ。

『此處に花のやうな花嫁から、全權名譽のクームへの贈物があります。御覽の通り、恐ろしく眞白い、極めて薄いシャツであります。立派な絹織で、しごけば指環の中を通されると云ふ話です。イヤ全くその指環は直徑二尺もあつて、大の男が二人位は自由自在に拔けられるさうであります。』

午後は歌と踊とに轉げまはる。女客は飲み續ける。日が暮れると、クームが花聟を新築の離れへ導く、少し遲れてデバーが花嫁を其處へ連れて行つて、クームに渡す。クームは花嫁の手を花聟に握らせて其處を退く。それを機會に、お客は皆な退散するのであるが、昔は其夜ばかりか、それから數日の間、夜晝無しの大祝宴を續けたと云ふ。

[redacted]